



明るい社会にするために

鹿児島県・天城町立北中学校・二年

かくがわ りん
角川 凜

「俺の恐怖がわかってたまるか！まともに働こうが、友達や恋人を作ろうが、週刊誌にさらされれば全部無駄になるって突きつけられたんだぞ！どうせ無駄になんなら、最初から犯罪に手を染めて大金稼いだ方が得じゃねえか！」

これは松村涼哉さんの『15歳のテロリスト』(KADOKAWA 2019)という本の一文です。犯罪を犯すも、更生を目指していた灰谷ユズルでしたが、被害者遺族によって過去の事件を世間にさらされ、人生をやり直す気持ちを断ち切られてしまった時に言った言葉です。

この本を読んで、私は「犯罪」への見方が変わり、同情する気持ちが芽生えました。犯罪は悪い、そこは間違いないですが、加害者も被害者としての経験や思いを抱えていて、事件の表には見えない、心の奥深い思いがあることに気づかされたのです。ニュースやミステリーなどで事件を見聞きすると、犯人が一方的に悪いと、今までの私は思い込んでいました。けれど、加害者にも被害者と同じように、苦しみや悲しみ、痛み、そうならざるをえない境遇や育ちがあり、心の奥深く、本当の気持ちを見ていかない限り、根本的な解決にはならないことに気づいたのです。

この本にあるような悲しい現実には、どのようにしたら断ち切れるのでしょうか。私だって、大切な人が殺されたら、その犯人を許すことなどできません。けれど、復讐をすることが本当の意味で望むことではないことも分かっています。このどうにもならない痛みの連鎖を、どうしたら断ち切れるのか、私なりに考えたことを二つあげます。

一つ目は、心の感情を表現する対話の大切さです。それはガンジーの「全

ての攻撃は悲鳴である」という言葉を思い出したからです。人が人を攻撃する時、つまり加害者になる時、実はその人は相手を傷つきたいわけではなく、「相手が攻撃してきたからやり返した」と被害者意識で思い込んでいることが多いのです。これが復讐が起きる仕組みなのだと思います。これを断ち切るためには、この心の中の痛みや悲しみ、苦しみを言語化し、表現していくことが大切だと思いました。

受刑者同士の対話をベースに犯罪の原因を探り、更生を促すプログラムを日本で唯一導入している島根あさひ社会復帰促進センターを取材した映画『プリズンサークル』（坂上香、東風 2019）では、心の内を人に伝え聞いてもらうことによって、人との関わり方が変わっていくとありました。同じ気持ちの人と出会い、本音で語り合い、自分のことをわかってもらえたと共感してもらえることで、再犯率が大きく下がるそうです。人は一人で抱え込んでも、マイナスの気持ちが大きくなるばかりですが、人と話すことによって、他の意見やプラスの考え方を知ることができます。こうなれば復讐のために加害者を苦しめたり、再犯を犯したりしなくてもよくなるのではないかと考えました。したがって被害者が悲しい、悔しい、復讐したいという気持ちを打ち明けたり、共有できる場所をつくることが大切だと思います。

二つ目は、地域のつながりです。地域内のつながりが薄いと非行に走りやすいそうです。私は東京から徳之島の小さな集落に引っ越してきました。地域の濃いつながりを日々実感しながら生活しています。車に乗っていればすれ違うたびに手を振ってくれ、歩いていけば、「乗ってく？」とたくさんの方が声をかけてくれます。困っていてもいなくても、大人も子どもも、皆が声をかけ合い支え合って生きています。たくさんの方の行事があり、近所で知らない人はほとんどいません。子どもは全員が子ども会に所属し、掃除やボランティア活動、敬老会、歓送迎会、季節の行事、たくさんの方の時間を共に過ごしています。そして集落の大人は「他人の子も我が子のように育てる」とよく言っています。悪いことをしたらどの子も怒るし、そして本気で親身になって可愛がってくれます。徳之島の人はお互いに見守り合っている感じがします。これでは近所の方の目や信頼があって、悪いこともできません。地域の中でたくさんの方に話しかけてもらい、たくさん愛されて、人や自分のことを信頼することができたら、犯罪や復讐をしよ

うとする気持ちはきっと減ると思います。したがって地域のつながりをつくっていく取り組みが大切だと思いました。

これらのことから、再犯を減らし明るい社会にするためには、人とのつながりを大切にし、また同時に自分の本当の気持ちを打ち明けられる場所の存在が人の心を救っていくのだと思います。